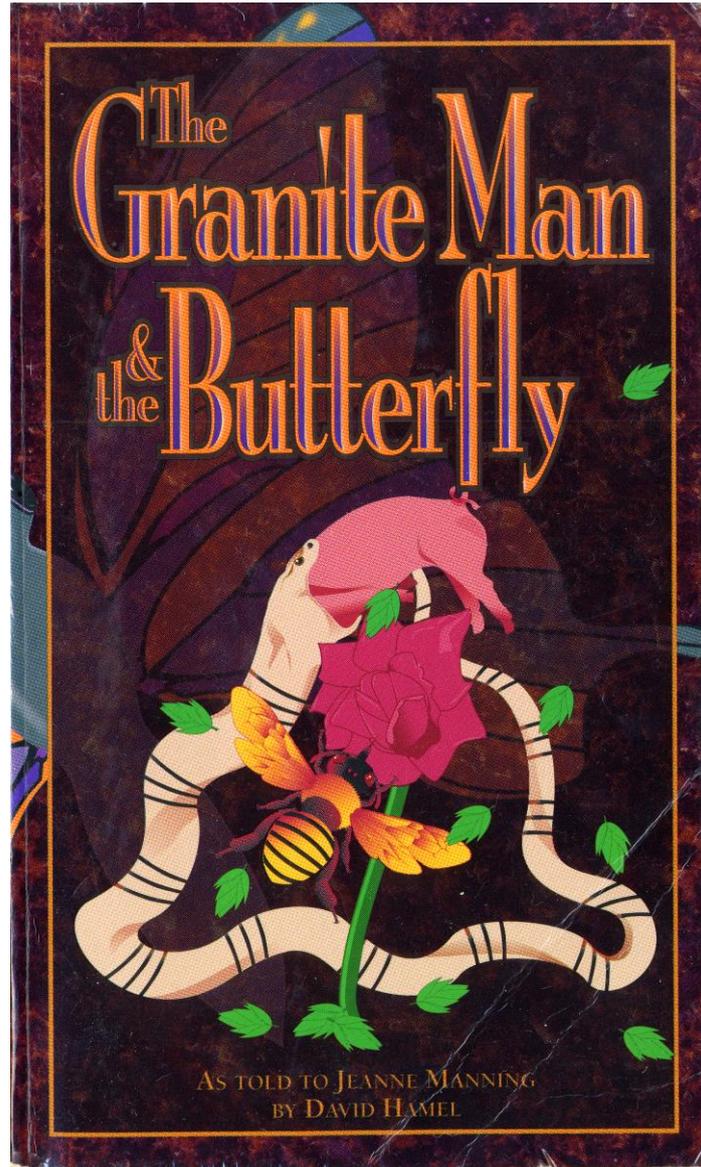


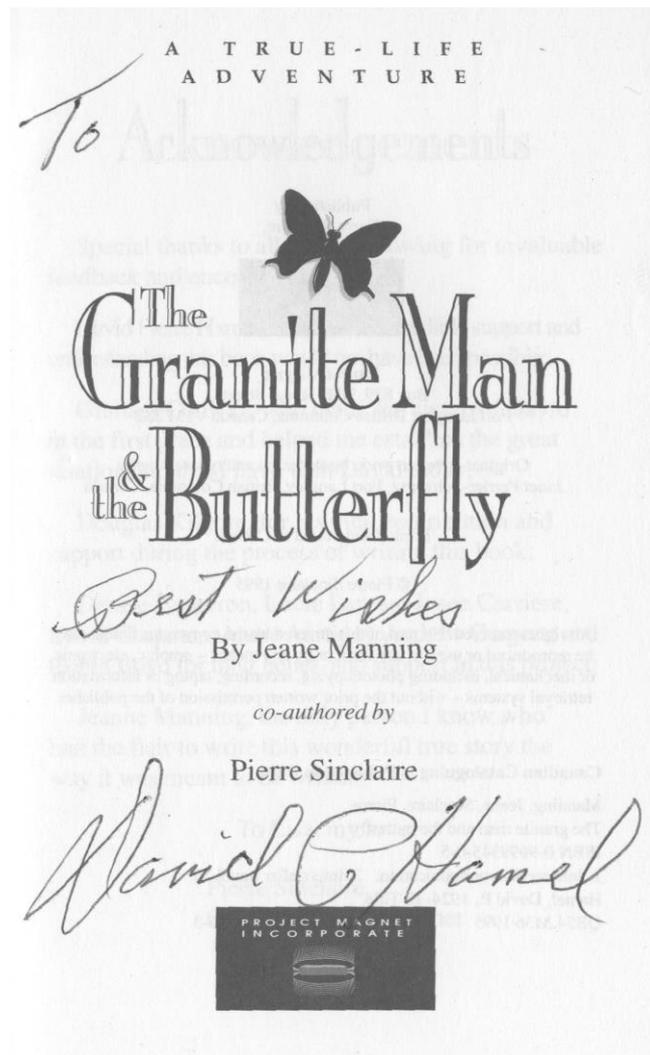
真実の人生の冒険

花崗岩の男と蝶



ピエール・シンクレアとジーン・マニング著
ピエール・シンクレアと共同執筆された

プロジェクトマグネット会社 (incorporation)



ピエール・シンクレアによって出版された。

プロジェクトマグネット会社 (incorporation)

私書箱 839、9037 ロイヤルストリート、

フォートラングラー、ブリティッシュ・コロンビア、カナダ V 1M2S2

カナダ ブリティッシュ・コロンビア フォート・ラングラー、

Janer Perrier-シュワルツによるオリジナルのブックデザインとタイプセッティング、

カナダで印刷されて、綴じられた

著作権所有 Pierre Sinclaire 1995 年

この中の著作権によってカバーされたこの部分を複製したり、またはグラフィック財産も、電子的、機械的にもいっさいが、使われてはならない。そして、出版者の先の書面による許諾なしに情報検索 systems-を含むレコーディング、テープ写真に記録したり複製することを禁ずる。カナダの出版データのカタログにいれてある

マニング、ジーン、シンクレア、ピエール

花崗岩の男と蝶

ISBN 0-9699345-0-5

1. Interstellar 惑星間コミュニケーション。

2.

恒星間の旅

ハーメル、デイビッド P. 1924-II。 Title。

QB54.M361995 001.9'4 C95-91031

感謝 acknowledgement

以下のかけがえのない全ての人たちの、私への絶えざる励ましに特に感謝する
デイビッド・ピエール・ハーメルの驚くべき支持なしではこの本を理解することは、可能でなかった

グレアム・コンウェイ-----最初に私をデイビッドを紹介し
私が今日デイビッドと持つ大きな関係を確立するのを助けてくれた;

ダグラス・キルゴア----- この本を書く過程での彼の不可欠な貢献、そして、支持のため

デニス・バージェロン、ルーシー・ラロー、ジョゼ・カリエール、
デイビッド・チャップマン、アンドレ Austiguy、アンドリュウ・Gorgerat、そして、ロビン・ボイド-----このプロジェクトへの信念と、支持のために

ジーン・マニングは、この素晴らしい実話を書く方法を知っている才能ある唯一の人だった;

愛するリサに。

Pierre Sinclair,
ピエール・シンクレア、
共著者と出版者
1995年

目次

第1章 死の淵から逃げろ...

第2章 勇敢な行為...

第3章 FAMILY MAN ...家族的な男

第4章 NORA ノラ

第5章 飛行 フライト

第6章 神秘的な木の葉 神秘的な訪問客

第7章 突発的な飛行

第8章 敵をつくる

第9章 プロジェクトマグネットに向かって

付録1

ウィルバートスミスと彼のプロジェクトマグネット

彼の肖像

謝辞

第1章 死の淵から逃げろ...

「なんで私なのか？」

デイビッド・ハーメルはしばしば彼自身にこの質問をする。そのとき、彼は1975年10月のその劇的な瞬間について考える。

どのようにしたら、彼の人生の一晩での運命的変化を簡潔に、解説することができるのか？彼の肩に軽く触れられた、それを、彼は星からの微風と言うかもしれない。

彼は、その素晴らしい飛行をことばにする詩人でなければならない。

しかし、彼は詩人ではない；

彼は、経験の美しさと深さに圧倒される通常人である。

その夜の遺産は、彼の残りの人生の間の圧倒的挑戦の始まりとなった。

自宅に残ったノラのためにはその遺産はミステリーとして解決されなかったことも、結局感謝すべきだった。

しかしその経験の間、デイビッドの力強い肩に置かれた仕事は法外なものであることを双方が知っていた。

なぜ、そのような任務が、単なる一介の大工に与えられたのか？

彼はとても重要な、援助を得たのか？

おそらく、最初の質問「なんで私なのか？」の手掛かりは、

以前の戦争の年にデイビッドの挑戦によって、内側と外側の強さがテストされたことに見る



Rosemont (ケベック) で、デイビッド・ハーメルは、1924年5月14日に生まれた。

彼は、13人の兄弟のうちの1人であった、全て兄弟は成人期まで生き残った。

ハーメル家に不景気が忍び寄ったとき、彼らはしばしば下町の家か町の郊外に移った—彼らは余裕をえる場所を発見しようとした。

彼の父は、ビール・ワゴンを引く馬達を所持しているビール卸売業者であった。

若いデイビッドには彼の父は毎日ほぼ1バレル飲むにちがいないと思えた。

要するに、男の子は厳しい現実と戦う普通の家族に生まれた、そして、人生の初めから、彼は自足を学んだ。

子供の時、彼がモントリオール校庭の大きな水溜りの中に入ったとき、デイビッドは電

気の危険な側面をみる最初の経験をした。

知らないで、送電線がきれ、水に落ちた。

電気が体を急に流れ、学校の金属フェンスに放り投げられ、意識不明になった。

別の人だったら死んでいたかもしれない場面で彼が生き残る頑健な体質であるのが見るが、これが最後ではない。彼が10代の年に達したとき、デイビッドの両親は長く彼を学校にしておくことができなかった。



写真：カトリック教会の最初の聖餐式。

彼はにがさを感じなかった。そして、父が彼の大家族のテーブルのパンのために彼のベストをつくしているということを知っていた。

彼が9学年に達して、旅行を開始したとき、デイビッドは学校を出た。そして、仕事を探すために貨物列車に飛びこんだ。

時々、彼は食事と引きかえに農民のために木を切ったので、昼間の間だけ仕事をした。

デイビッドは、身体的に彼は全盛期にまだいなかった。

おそらくハーメル家テーブルの食物の不足のため、彼は高さ 5 フィート未満だったが、この時背が伸びた。

しかも、肉体労働は強い筋肉も作った。

彼は、複数の出来事のなかで彼の生命を救う力強い体格を発達させる途中にいた。

それから、彼の人生と他の皆の人生に新しい焦点—第 2 次世界大戦が、入ってきた。

彼は未成年だったので、デイビッドは何度もカナダ軍に加わろうとして挑戦しなければならなかった。

彼はついに陸軍輸送兵科とともに海外へ出兵され、そして **Lorn Scots Army Service Corps** (カナダ軍の 1 部) と呼ばれているスコットランドの一隊で警備員の任務を果たすために移動した。

彼はその時それほど英語をよく話せなかったので、青年はフランス系カナダ人の部隊、**Les Fusilier Mont Royal (FMR)** という、第 2 師団へ転送された。

FMR は、ディエップ急襲に向かって進軍した。

ヒトラーと戦うために彼らの国の軍に加わった何十万人もの他の青年の様に、デイビッドにとって戦争は、その時までの彼の人生で最も劇的な事件であった。

しかし、彼は 30 年以上後に、それを全て越える経験をする、そして、その後、彼は「なぜ、私なのか？」と尋ねる、たぶんこれが、手掛かりであった

彼の 1975 年の驚くべき経験についての答えは戦争の年の恐怖に隠され示されている。



1944 年 6 月 6 日 ノルマンディ上陸作戦の日、彼の連隊は、フランス中を進む連合軍のほぼ正面だった。

その日彼らは **Falaise** で、ドイツのタンクの発砲に縛り付けられ、**David E Hamel** は個人的にもアドレナリンの消耗と混乱と疲労を感じおそらくあらゆる戦場の兵士を一杯にする恐れ、狂気と悲しみを感じていた。

これらの感情について考える時間は、なかった；

兵士は彼らが訓練されたことをし続けた。あるところで、戦場の途方もない騒音に、彼の仲間のうちの 1 人は、絶望して叫んだ

「我々は、ここで野郎どもを手に入れるにはあまりに速く進んできてしまった！」、デイビッドだけは機関銃のガラガラいう音の中で彼の話を聞いた。

デイビッドは彼の親友 **Private Chopardos** の肩に触れた、彼の顔とユニフォームを泥の縞がおおっていた。

戦場の狂気と対照的に、彼らの瞬間的なアイ・コンタクトは、短い分別をうむ。

彼の僚友は、3昼夜の戦いの後、左右に倒れていた。

それから、最悪の場合はデイビッドに起こった一弾丸は彼の最高の仲間に穴をあけた。

体は、デイビッドの前に直接飛んだ、うつ伏せに泥に着陸する前に

彼の心臓から兵士の血が噴出した、

Chapardos!、デイビッドは叫んだ。

しかし、その名前に答えた兵士は、死にかかっていた。

弾丸が頭上で風を切るのも、悲しみに打ちひしがれたデイビッドは彼の友人のために何も
す る こ と が で き 、 な か っ た 。



上の列の左から2番目がデイビッドの親友の Chapardos

彼は心臓を銃弾が打ち抜かれて死んだ。デイビッドは親友の心臓から血がほとぼし出るの
を見なければならなかった

1944年7月19日に、皮肉にも、太陽は出た、

しかし、少数派の気分を上げるにはあまりに遅く、カナダ人は水に浸され血だらけの戦場
に残った。

残された部隊はドイツ人に囲まれた。

それから、向かい合っただけの遭遇になったがそれは、兵士の悪夢である。

デイビッドの最初の照準となったドイツの兵士は

あまりに近い射程距離なので、彼を徹底的に動揺させた。

「なんてことだ、彼はあまりに我々と同じようだ。

どうして、互いを殺すことができるか?」、デイビッドはブレン銃（毎分120回発射する自
動マシンガンを持っていた。

Les Fusilier Mont Royal の最高のブレン銃の射手として、彼は簡単にやめる準備はできてなかった。

しかし、銃をつかむ所は、泥ですべり落ちやすくなめらかだった。

彼は泥でいっぱい銃身にもかかわらず撃とうともう一度やってみた、しかし、発砲メカニズムは動かない。

15 フィートの距離くらいで目と目を合わせている敵の兵士が彼は撃てないことを知っていることを確信していた。

同じように武装した敵兵への慈悲を示さないように訓練されている他の男も、多分同様に恐怖に襲われていただろう。

彼は、デイビッドに発砲した。

それから、再び発射した。

ショックが彼の体を通して爆発したので、デイビッドは気絶した。

後で、彼は意識を取り戻して彼自身を発見した。そして、彼の仲間によって運ばれた、連隊の生き残りは行進したので、銃が付いたドイツのタンクは彼らに発砲した。

彼らの伍長は連れ去られた。

デイビッドは、痛みを伴って弾丸で破壊され

それは彼の肺の近くの胸を突き抜けて、彼の背中から出た。

そして、2 発めの弾丸は背中の脊柱の 4 本目と 5 本目の間に金属を残したまま出た。

ドイツに接收されたパリの病院に短い停戦が、あった

フランス人の医者が兵士の傷の手当てをするのに十分な長さだった

それから、デイビッドと彼の仲間は、そこで鉄道駅に捕らえられ

彼らは、ポーランドに連行されるユダヤ人の囚人と一緒に、有蓋貨車に詰められた。

カナダの囚人は、キャンプに連れて行かれ、

その途中で彼らは尋問され、脅かされて、もう少し質問された。

そして彼らは更に悪くに扱われた。

デイビッドは、8 匹の馬を飼育することを目的とする有蓋貨車に押し込まれた

その時、そこには 48 人の負傷した囚人がいた

傷つかなかった人々は、他の鉄道車両にもっときつく詰め込まれた。

10 日間熱い有蓋貨車につめ込まれている間に、2 回電車が停止したとき乾燥した囚人は、貧弱なジャガイモ・スープと水の一人前だけを受けた。

ただ、彼らは、排便するためだけ外にいてもよかった

2 回の停止で、死者は運び出された、以前に電車で死んだ者と一緒に集団墓地に埋められた赤十字のマークが各々の車の上になかったので、同盟国は空中から地上掃射した。そして、多くの人々を傷つけた。

1 つの爆撃は直接、いくつかの有蓋貨車を爆破した。そして、彼らの地獄への旅をよけい遅らせ苦しいものにした。

ついに、彼らは **Stalag 12D** という名前をつけられるキャンプに到着した、そこで、ユダヤ人の囚人は非ドイツ語の人たちから切り離された。

デイビッドが **Stalag 12D** にいた短い期間は彼の健康を保つだけで、外へ逃亡する方法に集中することはできなかった

彼のキャンプでのアイデンティティは、ナンバー70437 と呼ばれるのと同じようにほとんどなかった。

彼は **Stalag 12D** からポーランドとドイツの間の境界にある捕虜キャンプである、**Arbeitskommando 1007** に移送された

彼が到着したとき、「強制労働につかすか、銃殺される」と仲間の囚人は噂を伝えた。

次の場所は、焼却炉」だ。

捕虜になって悪夢のような日の間に、デイビッドはロシアの囚人が他の捕虜と一緒に集められているのを見た

腕章をつけたロシア国民は、KGBだと言われていた。

これらの兵士はすでに死が間近いように見えた彼らの同胞を機関銃で撃った。

仲間の囚人は **KGB** であったことを証明している腕章をした人は命令で彼ら自身の家族のメンバーを殺さねばならなかったとデイビッドにささやいた。

嫌悪の感覚で、デイビッドは死体からリングと腕時計を自由に取りそして、金の充填材を得るために死者の口から歯をもぎ取るドイツ人兵士を見た

そのような劣悪なふるまいを目撃することは、彼自身の痛みよりも、耐えるのが難しかった。

彼は、他のキャンプのユダヤ民族が尊厳を奪われて待遇されていることを知っていた。

あたりの空気は、致死性ガスの悪臭がしていた。

スラブ国籍の囚人の間でも、情報提供者の噂または言語の誤解から、嫉妬と狭量によって他の **Slavics** と戦いがおこり殺害に終わっていた

デイビッドは、後で、彼が見たものを考えた。

「このような憎悪は、この世で我々が誰かという知識と我々がここに生きている理由を知らないことに起因する。」

しかし捕虜として5ヵ月を耐えぬく青年として、彼には彼自身の偏見があった。

Arbeitskommando キャンプには200~300人の囚人がいた。そして、英国軍に所属する彼らのほとんどが北アフリカで捕えられていた。

彼らは2年以上キャンプにおり、デイビッドは彼の仲間のフランス系カナダ人が捕虜として生き残る方法として敵と親しく交わるのを見た。

訓練された兵士は、逃亡することが任務である、デイビッドはそれを試みることを決心した。

彼は、いくらかの余分のパンが手に入らないか彼の仲間の囚人の間で、静かに聞きまわった。

英国人は拒絶した。そして、彼らを捕まえた者が逃亡者がいたら1ダースの囚人を殺すと脅迫していたことを思い出させた。

デイビッドは、生きているかぎり挑戦しようと思いつけた。

囚人と警備員は2、3の敵の言葉の単語で話すこともできたが、デイビッドは考えを独りだけに秘めておくことを学んだ。

警備員の脅威は、彼の逃亡の決意を強化するだけだった。

彼には、単に運命を受け入れるだけだった他の囚人に対する尊敬がほとんどなかった。

「おまえらは、反抗するにはあまりに臆病だ too yellow. 警備員の携帯する銃を奪って、反撃したり、何かできるはずだ！」と、彼がうんざりしてつぶやいた。

一般的に、ささくれたフランス系カナダ人は、英国人とあまりよくやってなかった。

ケベックからの囚人たち全員、彼らがお茶会グループと呼んだものを嘲笑し英国人と口論した。

彼らを捕獲した者たちは、その対立が好きだった。

「あんまり幸せではねえ野郎だ、こん畜生、

警備員を一日中に見つけながら、デイビッドは考えた。

警備員がブーツをとりあげたので裸足で、畑にかがんでテンサイを選別し、砂糖工場処理する仕事を囚人は与えられた

「利敵行為をしている」と、デイビッドは彼の仲間の囚人に言った。

「私は利敵行為はしない。」

デイビッドは与えられた仕事に取り組むことを拒否した、食物を集める一警備員は、彼のふくらはぎを銃剣で突きさした。

重い鞭打ち刑と虐待は、デイビッドを疲れさせるはずだった。

その後で、警備員は銃剣で彼を工場に押し込んだ。

彼は、このように一見単調な仕事を強いられた、

しかし、目は状況を妨害する機会のためにいつも開いていた。

ある日、地上に落ちていたさびた金属ナットとボルトとワイヤーの断片に気がついた。

誰も見ていなかったとき、これらをひろった。

その日の後、工場の原動力である発電機の近くに立っていた。

彼はチャンスをうかがっていた。

警備員の注意がどこかほかについていたとき、す速く横へ動いて、発電機にくず鉄を投げ入れた。

発電機が爆発したときは、少し離れて無邪気に立っていた。

他の人がしているようにクッキー、タバコまたはお茶会のための取引の代わりに彼が、赤十字パックにバター缶を貯蔵している理由で

彼の仲間の囚人の何人かは、デイビッドが逃げる決心だということを知っていた。

しかし、誰も彼を説得して計画を思いとどまらせることはできなかった。

毎日、囚人が強制労働から帰るとき、彼の窓の外を密かに見まわし、彼の計画的な脱出ルートをよく見た。

戦争が激しくなったので、囚人は近くのドレスデン市に送られ通りで死体を拾いあげ、馬車に放り込んだ。

収容所に再び帰ってゆくとき、

通常他の囚人は、消耗して頭を下げ敗北した男性のように引かれてゆく。

彼らは、レンガの建築から逃げることをずいぶん昔にあきらめていた。

しかしデイビッドは、ひそかに刑務所の建物を詳細に調べて、1つの窓は外側に3本の有刺鉄線だけが張られているのに気がついた。

線は、窓枠自体に固定されていた。

強い満足感で、彼は刑務所の建設のこの些細な不注意に注目した。

さらに、ワーク・キャンプにいった時、それはフェンスと収容所の捕虜を護衛する番犬によって、囲まれていなかった。

監督者が注意を払わない時、夜の暗闇で時間をえたときはいつでも、

デイビッドは、打ち込まれた釘を露出させるために、指の爪と金属の釘を使ってこっそりと窓のまわりのセメントをこすった。

近くの都市への爆破音が削る音をおおい隠すのに十分大きな時間を選んだ。

警備員が見ていないときはいつでも、コンクリートをこすってはがし、布の断片から作った紐で釘を引き抜くことができるように集中した。

ある夜、疲れた僚友が眠る間、デイビッドは素足を死体からとった衣類のはぎれで包んだ。

そして、これまで進めてきた彼が脱出用ハッチとみなした窓枠の釘の仕事を完了した爆撃の騒音は、彼が窓を下げるきしった音を覆い隠した。

彼は、開いて体を押しこんで、地面に落ちた、

それから、外側から窓枠を持ち上げきちんと元に戻した。

彼は、文字通り地獄のような焼夷弾の攻撃が始まったドレスデンの火の中へ、逃げた。

彼は夜の暗闇の中を求めて、遠く田園地方に逃げ込んだ。

飛行機が頭上に接近しているのを聞いたとき、胃の高さまである草の中に飛び込んで、納屋の方へ這っていった。

そこで、彼は必要としたものを見つけた。

薄暗い光の中で、漠然とした輪郭からケベックの農場にいた大きな骨格の農作業用の馬を思い出させる馬を見た。

「おい、馬ちゃん、おまえさんより俺にはそれが必要なんだ。」

デイビッドは、毛布を着ている馬を静めるために、手を差し出した

彼には猛烈にそれが必要だった。

「静かにしてろよな」と、幸いにも知的だった動物に彼はつぶやいた。

「楽にしてろ。ちょっと待ちな、ほどいてやるから。そのひもも欲しいんだ。」

デイビッドは馬から毛布をすばやく、引き下ろした、
それから、2本の有刺鉄線をとりはらったので、ばんという音で床に丸くなった。
納屋の戸の影から去る前に、彼はフェンスと建物のぼんやりした輪郭を見ようとしてしばらくそこに立っていた。
どこか向こうに菜園が、なければならない。
そして、飲み水も-----。
夜が終わる前に、彼は食物と水を見つけた。
数日間、彼は夜の間に炎を上げる混沌とした都市の郊外で1つの隠れ場所から出ては、もう一つ場所まで走って行った、そして日中は隠れた。
彼が走って、見た風景は、吐き気をもよおした。
1つの爆弾は図書館を攻撃し死の場所にした、そして、炎は焦がされた建物をまだなめていた。
低い地階の窓を通して、生きて焼かれている子供たちの腕が窓から助けを求めて突き出されているのを、見た。
彼が近くで燃えている都市の大火災を止めるために何もできなかったのも、残骸を見て通り過ぎた。そして、倒壊の場面から逃げて、連合軍と連絡する手段を探した。
誰もが地階とシェルターに隠れたので、通りは空だった。
毎晩、彼はサーチライトを見、地上から銃を発射する「ボン・ボン」という音を聞いた。
ドレスデンの包囲は、強まった。
あるとき、連合国の飛行機が頭上を飛んだので、彼は隠れていた場所から空を見た。
飛行機の波から波の一連隊が、都市を爆撃した。
彼は、連合国とナチ・パイロットの間の個別の戦いを見ることができた。
このようなドラマの間に、彼は爆撃機を越えた上空に存在する何かを凝視した。
戦いのずっと上空に、5つのV字形にのびた明りは、しばらくその形でじっとしていた。
突然、形はもっと増加してダイヤモンド形になった。
周辺が爆破中でもこのひかりは、そのままだった。
囚人は当惑し、上空の静かな高い標高の明りが何かと疑問に思っていた。
戦略家はこの重要な戦いで観察されたような先進技術の航空機を、持っていたのか？
彼は、数十年後まで答えを得られなかった。
最終的に、カナダ人の逃亡者はドレスデンで多くの場所を転々とした。暗闇で彼の足が鉄道の線路の木に触れたとき、彼の内にかすかな希望の鍵がきらめいた。
「これで私が自由でありえる所に、いけそうだ」と、内部の声がささやいた。

第2章 勇敢な行為

彼は、土で守られた貨物輸送作業場に入って、入口の近くの大量の石炭の中に隠れ場所を発見しトンネルの方へ、鉄道線路をたどった。

彼の肩に結んだ盗まれた馬の毛布さえ震えるので、彼は着方を工夫した。

明らかに、装甲車両タンクを積んだ平台型貨物列車の列は、ポーランドと東に向かうはずだった。

デイビッドは、考えた。

夜明けになって貨物輸送場に光がさして、動きが始まる前に、彼は汽車の下の平台にはつてもぐりこんだ。

安全な汽車の床の下に毛布を針金でとめた。そして、隠れたハンモックを作った。

およそ2週間、このハンモックは、彼の家となった。

電車が動いているときはいつでも、車輪の雑音で消えるにもかかわらず、電車が止まったときは、発見される危険があるのでデイビッドは、ドレスデンを出発すると安心した。

揺れているハンモックの上に彼が震えながら横になっていたので、平台の下側から顔を少し動かせるだけだった、彼の戦争の怪我は激しくずきずきした。

しかし、食物を探しに出ることが出来なかった長い日々、彼の背中痛みは、飢えと萎縮を覆い隠した。

電車が止まったときはいつでも、それをカモフラージュを命令するドイツ軍兵士の叫び声を聞いた。

彼が隠れた平台型貨物車はタイガー・タンクを運んでいた、そして、大量の丸太が重いケーブルで車の上に縛られていた。

天候はますます冷えていった、そして、デイビッドの夜の間の食物の探求はより大胆になった。

彼は、彼の体力を維持することが重要なことを知っていた。

ある停止時間に、彼は2、3の衣類のボロが凍えないようにしてくれることがわかった。

一度日が暮れる前に彼はドイツの兵士がタンクから平台の上にとぶのを聞き、さらに、彼らが端に座って、叩くのを聞いた。

彼は、彼らのブーツが側面にぶらさがっているのを見た。

彼らは夕食を取っていた、そして、時折食物のかけらが地面の方へ落ちた。

兵士が完全に彼らの会話に集中しているようだったとき、デイビッドは腕を伸ばして、多

少落ちて残ったパンくずをうばい取った。

彼が漠然と理解できるだけだったが彼らの会話の一部から、電車が本当にロシアの方向に頭を向けて東に向かっていると考えた。

旅の最初のころ、致死性のガスが漂っている停留所の一つで彼らが囚人を降ろしているのを聞いた。

急速に建設された木材を伐採する傾斜路でタンクは、下に動いた
そして、フラットベッドから落ちそうになりまた戻って進むので、
デイビッドのベッドは、不安定に傾いた。

誰も、電車下の部分を仔細に見ないことを彼は祈った
それでも、彼は発見された。

小さな薄汚いプードルは、おそらくドイツの役員の 1 人に飼われていて、鉄道車両の下を
探検し、ハンモックを発見した。

小さい生きものが毛布の上にとんで、デイビッドのひざに出会ったとき、犬はそれに噛み
付いた。

犬のあごはかみこんだ、そしてしっかり固定した。

デイビッドは、悲鳴をあげないように、黙るために彼自身の口を固定した。

「お前の犬をつかまえたなんてゲシュタポか SS に話すつもりは毛頭ない、！」と、彼は思
った。

彼らがいたので、しっかり犬の顎をひざに固定していなければならなかった、そのため、
問題なく放すまで、ほえられなかった。

これは、犬に何をすべきか理解する時間を与えた。

犬が呼吸できないほどきつく犬の鼻をつねった、すると、噛み付いた彼のひざを放した。

デイビッドの心臓は、犬がほえて、兵士の注意をひくのを恐れでドキドキしていた。

その代わりに、犬は跳び降りて、注意を引かない小さな悲鳴とともに走り去った。

その後、デイビッドは彼のハンモックに背をもたれた。そして危機一髪だったと、汗をか
いて、震えた。

犬の噛み傷はデイビッドのひざの皮膜をかなり突き破っていた、しかも、これから起こり
えるあらゆる感染症が心配だった。

やっと見えるようなぼやけた村と一緒に毎日は過ぎていった、そして、田園地方を通った、
そして、デイビッドはカモフラージュされた電車から這ってでて、水とたぶん盗むことにな
る食物を求めて近くの農場を捜したとき、夜は多くの緊張した瞬間で満たされていた。
ある時、軍隊がまわりにいなかったとき、彼は電車に登って、敵の食物の割当てから食事
を盗みさえた。

それは、神経をつかった。

その後、彼は賞賛の言葉を得たい気がした。

ある日、電車の下に彼が 2 週間以上いたあと、デイビッドはこの戦争の世界の一部が分岐

点に来ているのを感じた。

過去 3 昼夜、遠くにロシア軍とわかる銃の発砲を聞いた。そして、しだいに間近になってきた。

電車は止まり、それをカモフラージュするために走り回るおびえた兵士の混乱があった。地元のユーゴスラビアのゲリラは電車を攻撃した。そして、カナダの脱獄囚がこの地域を歩き回るとはさらに危険になった。

逃亡者は電車で大量の丸太を見、ランプの下の丸太がタンクを地面の上に急激に転がす手段となることを知っていた。

デイビッドの有利な視点からは、戦略的資源を見ることができた。そして、連合国のパイロットにはどれも見ることはできずと理解した。

大きな石油貯蔵タンクが近くにあった。そして、山腹に組み入れられていた。大型戦車は、高さおよそ 40 フィート直径 80 フィートあった。上を飛ぶどんな飛行機から見ても、それらは山の延張のように見えるカモフラージュの下に隠されていた。かれらは攻撃し続けたが、ゲリラはこれらを吹き飛ばすために十分近づくことができなかった。

なんとそれは、ドイツの燃料供給施設への連合国爆撃機に協力するクーデターとなる行為であった！

隠れた石油タンクは、鉄道自体よりさらに戦略目標である。

ドイツ人兵士運ぶ装甲戦闘車両を載せた気車はカムフラージュされて何日も隠れていた。デイビッドには Livitsia と名前を理解した近くの町に逃げ込んだ。

彼は、地下のゆるく組織化されたいくつかの方言を話す兵士の一団に連絡した。

彼らは、進行中の戦いでドイツ人兵士と発砲を交わした。

敵から逃げるためにゲリラ戦士と村を走っている間に、デイビッドは通りで金属の蓋を発見した。

そこからはしごを降りると、トンネルに入るのに気がついた。

通りの下に行くこの大きな下水道パイプは、完全な隠れ場所である。

トンネルの中は完全な闇で何も、見ることはできなかった。

どこに行くべきかさわりながら前に手を伸ばしていると、誰かが転がり込んできた。

まるで命をかけて戦うように、この人はすぐに防衛にはいった。

彼らは暗闇で盲目的に取っ組み合ったので、デイビッドは指にかみつかれた。

その人は、手で殴打して、デイビッドの指を骨まで噛んだ

そして間接で、指は折れ、ほとんど釘に近い状態になった。

必死の乱闘が続き、男は噛んで、デイビッドの手の中指を折った。そしてずっと、あごを開けて指を解放しようとはしなかった。

デイビッドは、彼の口を開かせるために、その頭を壁にぶつけ強打しなければならなかった。

デイビッドは、急いで、彼が個人的隠れ家とみなしてきたトンネルから出た。

彼が次に帰ってきた時、知らない人は去っていた。

ゲリラ戦士には、明らかに、ドイツの巨大な石油供給タンクを吹き飛ばすだけの、長期間燃える火力が不足していた。

どのようにしたら、連合軍パイロットは、この重要な目標物を知ることができるか？

夕方の暗闇の中で連合軍の爆撃機が来ているのを聞いて、デイビッドは隠れた場所から覗いていた。

ドイツ人兵士は、明らかに汽車の上の、戦車の中にいた。

彼は、バターから作ったロウソクと芯と缶を得るために、プラットフォームの下にそっと戻った。

そして、誰だか分からないユーゴスラビアのゲリラのライフルと地上砲火からの危険を無視してデイビッドは無我夢中になって大胆に外に走って、彼の手製の照明弾で爆撃機に合図した。

彼らの注意をひくために、モールス信号 S.O.S.信号を使った。そして、彼が炎を上げて燃えるためこんだバターの缶の上に繰り返し手をかざしたので火傷した。

やった！

連合軍の飛行機に乗った誰かが、彼の光るメッセージを見た。

飛行機の搭乗員はこの地域を照らす照明弾を落とした。そして、タンクを載せた鉄道車両を照らし、山腹に沿って存在する巨大な石油供給タンクを出現させた。

彼の任務が達成され、デイビッドは隠れるために走った。

ブダペストからのユーゴスラビアの医者脱獄囚デイビッドの人知られぬ、勇敢な行為を目撃した。

Dzubomir Zivanovitch は、ゲリラ軍を援助するためにそこにいた医者であった。

爆破が始まる前に、デイビッドは列車に着いた。

非常に速く、照明弾が鉄道車両とタンクを照らしたあと、空中の連合軍は両方の目標物—鉄道と貯蔵タンクに 彼らの爆弾を発射した。

電車が攻撃されたとき、デイビッドは丸太の堆積の1つに隠れた。

ちょうどその時、はるか遠くの線路の下のタンクは、爆発した。

彼は体に保護スペースを作るために、2、3の材木を移動したが、爆発の力はあまりにたくさんの材木を移動させた。

回転する材木はわずかに彼の肩を押しつぶし、彼の鎖骨と足を痛めた。爆破の後、ユーゴスラビアの医者は、デイビッドを材木の堆積から引き出した。

足の怪我にもかかわらず、急いで火災から逃げねばならず、デイビッドはなんとかのろのろ進むことができた。

二人が現場から問題なく逃げたとき、敵の電車と燃料供給が吹き飛ばされたので満足して互いの背中をたたいた。

Dzubomir Zivanovitch 博士（その人は少し英語を話した）は、自己紹介して、彼が医者と

同様にユーゴスラビア軍の少佐であると言った。

彼はデイビッドを僚友のキャンプへ連れて行って、彼の手に包帯をした。

医者（その人は彼の50代だった）は、赤毛で血色のよい顔の大きな男性で喜びに満ちた人に見えた。

状況はまだ混沌としていた、そして、ゲリラは隠れたままだった。

医者は彼の睡眠を助けるためにデイビッドに2つの錠剤を与えた、そして、その翌日食物をもって戻ってきて、健康診断をした。

山の高さで、デイビッドは電車が遠く東へ来たと判断した。

ゲリラ戦士のうちの1人は、彼のジェスチャーを理解して、彼らの場所を解説した：

「オデッサから150キロメートル。」

彼の腕の動きは、ユーゴスラビアの東、黒海の近くのオデッサの町の北に彼らがいることを示していた

その翌日の午後、ロシア軍は道のカーブを行進した。そして、新しい制服を着ていた、それは、彼らが今戦争に加わったのと同じくらい新しく見えた。

「彼らは、発砲する必要はなかった。

すべては終わった。」とデイビッドはゲリラ戦士に、ロシアの同盟者についてコメントした。新しい仲間には彼の言葉がわからず、まるで理解したように、うなずいていた。

ロシアの軍リーダーが彼らの国の勝利を主張するとき、藪に隠れていたドイツ軍兵士はスラブ世界のいろいろな代表者によってとり囲まれていた。

ロシア人、フランス系カナダ人の兵士と一般のゲリラ戦士が敵の戦略的資源の破壊と地域を獲得したという状況の重要性を理解したとき、彼らの祝賀の思いは言葉の障壁を越えた。その時町でのロシア軍の解放を示す行進と同様に、彼らは敵の燃料供給が吹き飛ばされているのを見た。

世界のこの部分での戦いが終わったという知らせが、来た。

およそ1週間後に、デイビッドは（オデッサの北）Vinnitsaの、大きな空港にジープで連れて行かれた

多数の言葉を話せるロシアの役員が運転しながらデイビッドに質問した

沿道で、ロシア軍兵士は、戦いの終わりの喜びを表明していた。

デイビッドの回りには即席のパーティが続いていた。

大勢の兵士は、屋外の冷たい空気のなかで踊っていた。

デイビッドは、ひとかたまりの白パンと一口のウォッカを与えられた。

長い間黒パンだけを見てきた後なので、白パンはケーキのような味がした。

Zivanovitch 博士（連合国の爆撃機に合図する際に勇敢なデイビッドの行為を目撃したユーゴスラビアの役員）は、そこにいた。

彼は、デイビッドをロシア軍兵士に紹介する儀式をした。

彼は明確に、連合国の爆撃機を引きつけるために命を賭けたカナダ人の行為について話したので、兵士達は尊敬をもってデイビッドの方へ顔を向けた。

それは、変わった表彰儀式であった、

しかし、デイビッドは試練から生じた痛みと身体的な弱さを瞬間味わった。

彼の頭の大きさにあわせて穴を開けてある毛布を外套にし、ぼろぼろの衣類を着た彼は、それでも、彼自身の同胞と同じ側にたって戦ったこれらの兵士の前に誇りをもって立っていた。

彼は自身の軍隊から遠く離れていたが、それでも、爆撃機に合図することによって自分自身の方法で彼らを助けたことを感じた。

彼のヒロイズムを記念して、ロシアの大佐は、メダルをデイビッドの毛布にピンでとめた。

大佐は60代前半の男性で彼の強い握手によって厳粛に表現をした。そして、その強さはデイビッドの痛む手を苦しませるほどだった。

デイビッドは一般に認知された瞬間、謙虚さと同様に喜びを感じた。

彼がメダルを詳細に観たとき、それがロシアのリーダー（ウラジミール Ilyich イリッチ レーニン）の写真で飾られているのを見た。そして、その人は1870年から1924まで生きた。勲章の授与式の後、デイビッドは再びジープに腰かけ空港の方へのはずむようなドライブをした。

彼は、それだけの月日の間耐えた警戒の絶えざる緊張の一部を捨て始めた。

彼は、誰もジープを撃たないと理解し、再び本当にリラックスするのに長い間かかった車はその目的地に着いたとき、まるで空港が至る所からきた男たちによってとり囲まれたように思われた。

各々自身の国に送り返されるために、解放された囚人は、一緒に群れをなした。

ロシアの大佐がアンカラ（トルコ）にメッセージを送る間、デイビッドは身づくろいをされ、食事をした

そして、デイビッドと、ブリュッセルへの運行を必要としたほぼ1ダースのベルギー人達のためにアメリカ大使館の飛行機が空港に着陸出来ることを要求した

結局双発機がトルコから到着したとき、アメリカの空軍の人はデイビッドに付き添った。

大使館を表すことばとアメリカのワシのシンボルは、この貨物輸送機の先端の近くの、卵形のロゴの中に示されていた。

席はなかった；

デイビッドと11人のベルギーの元捕虜は、床に座った。

彼らのブリュッセルまでの飛行に、黒い服を着用し黒い帽子を着たトルコからの代表派遣団と一緒にいた。

あなたは、どこの出身ですか？」、と 1 人の役員は、彼が飛行機に乗った時、デイビッドに尋ねた。

「カナダのモントリオール。

私は王立モントリオール軍 Fusilier に属している、そして、私は Falaise で捕らえられた。役員は、驚きで彼をじっと見つめて停止した。

「どうして、あなたは Falaise から遠く離れたのか？

フランス系カナダ人は、どうしてはるか東にいるのか？」、「閣下それは、長い物語です。」、結局のところ、物語はまだ終わっていなかった。

デイビッドはブリュッセルで、シラミを駆除する合成物を振り掛けられるため護送されたそれは、帰国捕虜のため急遽造られた。

ゲートを通り抜ける者は、着物を脱ぐように命ぜられ、それから粉をふりかけられた。彼は、帰還兵士 P O.W s が最初シラミを駆除されることなく家に帰ることはできないと話された。

しかし、デイビッドは、異なる処置を受けた。

彼は病院のような建物で費やした混乱した時間の間、連れ去られ、再び現れない車椅子の人々に気がついた。

彼が日時について知っていた全ては、それは 1945 年 2 月の初当にあたるということだった。彼は、腕に何かを注射する、針の痛み気づいた。

今日まで、彼はこの病院で、数種類のショック療法がなされたと思っている。

この間に、彼のロシアの荣誉顕彰メダルは、消えた。

デイビッドが次に気づいたのは、ほぼ 3 ヶ月後であった；

彼は、彼がどのようにイングランドに着いたか記憶はないまま、ロンドンのベッドに起きあがった。

将軍のような高い位の将校は、ベッドにもたれて立っていた。

デイビッド・ハーメルは英国の王族を光栄に思うかと、役員は彼に話した。

宮内長官のオフィス（セント・ジェームズ宮殿）からの手紙は、彼を 1945 年 6 月 19 日に招待していた、

彼が出席した英国の庭園のティーパーティーは、ジョージ 6 世王と彼の妻エリザベスが臨席した

（その人は、次の 10 年後に皇太后になった）。

しかし、デイビッドは、レーニン・メダルがもはやないことを知った、彼はののしった。

彼は、メダルを返して欲しかった。

彼が王族とお茶を少し飲む事は、ほとんど慰めにはならなかった。

この将軍は、王と女王に手を振ることは彼の英雄顕彰勲章に等しい誉れであると彼に話そ

うとしていたのか？

また他の 700 人の P.O.W.s 帰還兵士は、国王と握手した。

彼は、疑問に対する答えをあきらめずに要求したいと考えた。

「なぜ、私は 2 月初めから、4 月遅くまで、何があったか覚えていないのか？」

「なぜ、私は皆のように標準のシラミ駆除を通過しなかったのか？」

「ブリュッセルで私は何を、されたのか？」

「どうやって、私はイングランドにきたのか？」

「Dzubomir Zivanovich 少佐によって与えられたメダルに何が起きたのか？」

「なぜ、何があったか誰も、話さないのか？」

彼は、安心させる、回答をもらわなかった。

後で、彼はもう一つ質問をつけ加えた：

私は国に驚くほど貢献し傷の証明をいくつも持っているのになぜ、私は書類の上で無傷と書かれて退院したのか？。

彼は質問の答えを得る権利があると思った。

彼は正しいと思うことについて、あきらめずに再三聞いた。